

隅田川花火大会に見る観光

A Tourism Study of the Sumidagawa Fireworks Festival

冨木 一馬*

SAEKI Kazuma

要約 国内で初めての花火大会が隅田川、別名・両国の川開き（大川の川開きとも呼ぶ）である。

ここ20年ほど前から花火大会は一大ブームとなり観客は増加するばかりである。しかしながら2001年7月21日に起きた「明石花火大会歩道橋事故」や2013年8月15日に発生した「福知山花火大会露店爆発事故」などにより警察などの指導強化において警備費を含めた全体の運営費が上昇、景気の悪化から企業などの協賛金の減少などを踏まえて年に3.4カ所ずつ中止に追い込まれる大会がある。そこで隅田川花火大会の歴史と共に運営費や観客などの数字を読み解きながら今後の対策や方向性を探るものである。

キーワード：観光 (tourism)、隅田川 (Sumida River)、江戸 (Edo)、花火 (Fireworks)

I はじめに

日本で最初に行政が主導して揚げたとされる大川の川施餓鬼は享保17年（1732）もしくは18年（1733）に行われたことになっている。前年の大飢饉や流行り病で亡くなった人を弔うために八代将軍吉宗が悪疫退散祈願と犠牲者の霊を慰めるために両国橋（大橋）付近で水神祭を行ったと三田村鳶魚氏の書かれた資料などにより受け継がれており、翌年の18年もしくは19年から川開きの初日に花火が揚げられるようになったのが今日の隅田川花火大会であると伝えられる。それが、いつの間にか納涼期である3か月間毎日のように涼船の客から求められては揚げるようになった。⁽¹⁾

また寛永12年（1635）頃には大川沿い（隅田川畔）にあった下屋敷で御三家を始め、仙台、金沢などの雄藩に所属する砲術師達が花火を揚げるようになり庶民は楽しみにしていた。特に伊達家の花火は人気があり、観客が集まりすぎて藩邸近くの万年橋が折れてしまうほどであった。

松浦静山の「甲子夜話」によれば大花火として両国、浅草、名古屋清洲、矢田川原などをあげている。

1 研究の背景

日本では、一年に約8500回（遊園地やテーマパークなどのイベントも含む）近くもの花火が上げられており、年々増加傾向にある。夏の風物詩である日本の花火は亡くなった人を弔うために揚げたとされるのが始まりで、その後納涼文化として根付いた。今回テーマとして取り上げる隅田川花火大会（大川の川開き）ほか土浦全国花火競技大会、京都府の南丹市花火大会など供養を目的に始められたものは多い。

今や一年を通して上げられるようになり人気を誇っている花火だが、特に2000年のミレニアムカウントダウンは大きな変化を与えた。西欧では当たり前のカウントダウン花火であるが、日本も追従するようにお祝いの花火を上げるようになり現在では約200カ所近くイベントを開催している。それだけ日本人は花火が好きなのである。

全体の花火の観覧客数は数億人とも言われ、年に複数回も観覧に訪れる者もいる。また花火業者の売り上げも500億近くに上るものと推定される。

私の知る花火愛好家たちは年に30～70回も観覧し写真や動画で撮影している。

ネット上で見る限り年に30回以上花火大会に足を運ぶファンは約1000人近く存在する。彼らの行動はいづれもSNSなどを利用して様々な情報を発信し一般社会に強い影響力をもたらしている。それによって旅行会

*大阪観光大学観光学研究所学外研究員

社がどこの大会でパッケージングツアーなどの商品を企画化すべく参考にしている。

2 研究の目的

国内で最も古い隅田川花火大会の歴史や事象を調査・研究することによって現代の花火大会における様々な問題点や今後の花火大会の課題や方向性を探り、花火大会における観光産業の影響を検証する。

3 日本の花火の魅力

日本に火薬文化が導入したのは天文12年（1543）に中国の船が種子島に漂流して辿り着いたことに始まる。島主の種子島時堯（ときたか）が乗っていたポルトガル人から二挺の火縄銃と鉄砲の弾を購入した。そこから火縄銃の生産が大阪の堺や和歌山県の根来寺、滋賀県の國友村など鍛冶技術のすぐれていた地域で開始される。特に滋賀県の湖北では良質の鉄材があったとされ、「出雲日御前神社文書」には出雲地方の鉄が北前船によって敦賀に陸揚げされ湖北に運ばれていたようで、腕の良い刀工が國友に移住して集まっていた。

火薬は戦争の道具である武器に利用され世界各地で鉄砲や大砲などが製造されていくが平和な時代が訪れた時に火薬の製造技術を後世に残すために花火に発展を遂げる。日本で最初に花火が作られたのは徳川家康の聖地、三河とされる。慶長18年（1613）8月6日、駿府城の二の丸に於いて唐人が揚げたものを家康ほか、義直・頼宣・頼房と尾張、紀伊、水戸の徳川御三家の初代藩主らが供覧、それを傍らで見ていた三河の鉄砲隊が技術を持ち帰ったことによる。その後、花火は火薬の扱いを許された徳川の親藩や雄藩に広がる。当時、西欧の多くの国々では人種や宗教の違いによる紛争が長く続き、武器の開発は一段と発展した。元々、火薬の発明や花火も中国が発祥でありシルクロードを渡り西欧に広がり、日本は火薬技術に関しては世界の中でも後進国であったが徳川の約300年の平和な時代に、日本の花火技術は瞬く間に進化を遂げ、現在は世界一の芸術品と呼ばれるにまでなったのである。では日本の花火の魅力はどのようなところにあるのだろうか。日本の花火には三つの特徴があるとされる。ひとつは真円になること。いわゆる綺麗な丸になることである。実は丸く開かせるのは容易なことではない。星と呼ばれる色を発する火薬を飛ばすための割薬の強さ、そして均一な星の並べ方、また「貼り」と呼ばれる球形の玉に貼るクラフト紙の枚数で強度を調整する。それでもなかなか綺麗な丸には開かないのである。直径30センチの10号玉（通称・尺玉）は上空で約300メートルに花開く。玉皮に星を込めるさいに1ミリずれると上空で10メートルの誤差が生じることになる。それだけ星込めという作業は困難を極めるのである。次に「芯」と呼ばれるもので円の内側に小さな円が描かれる。それはひとつだったり二重だったり、多い時には五重にもなることがある。この技術も世界で類をみない。最後に星と呼ばれる火薬の色が変化することである。これは掛け星という技術で異なる色の火薬が層をなしており、二色だけに留まらず三色に変化するものもある。実は日本で最初の打ち上げ花火が玉になったものは安永3年（1774）に確認できる。当時の玉型の花火は球形ではなく長玉と呼ばれるもので獣の皮などに花火の部品を詰めた袋状のもので開いても球状にはならない。各花火師はいかに綺麗な花火を作ろうかと考えて現在の球形の玉型に辿り着いたのである。逆に西欧では球形が先で、後に円筒形になっている。球形では誰でも簡単に作れず手間暇がかかる。短時間に大量の花火を製造するために円筒形に発展したもので日本とは真逆の理論である。日本で球形が作られたのは文政6年（1823）に見ることができる。玉心と呼ばれる球形の木型に紙を何枚も貼り合わせ、或る程度の厚みに達したら半分に切り開き玉皮を作る。そうやってひとつひとつ小まめに玉皮を作り星を正確に配置することによって真円の花火が作られる。この世界一の芸術品はアトランタやシドニーオリンピックでも打ち上げられ現在でも世界中に輸出されている。また近年では時間差牡丹やスライド牡丹など多種多様な変化を遂げる花火が開発され、インターネットを通して見る世界中の人々が驚いている。昨年に沖縄の宜野湾市で開催された「海炎祭」には海外から6000人もの観光客が訪れたことは、いかに花火が人の心を掴むのか証明したようなものである。

II 隅田川花火大会

1 隅田川花火大会の歴史

現在の隅田川は江戸時代、大川（おおかわ）と呼ばれており武蔵と下総の境界に当たる川で当時の資料では

大川から角田川（すみだがわ）と名称が時代と共に代わっている。角田川（大川）は江戸の街の端にあったため、そのように呼ばれて（表記され）いるものと推察され、現在の隅田川に繋がる。

寛永20年（1643）7月15日に家光が関ヶ原の戦いで亡くなった人々の追善供養として大川で花火を揚げる。翌年の正保元年（1644）には大川で民間によって花火が揚げられる。

享保（1716）頃から川開き（旧暦5月28日から8月28日まで）が始まるが、この頃花火はなかった。

享保17年（1733、18年説もあり）の5月28日に八代将軍吉宗が水神祭（川施餓鬼）を行い幕府主導の花火を揚げることになる。それ以降、川開きの初日に花火を揚げるようになり文久3年（1863）まで続く。その間の安永（1772）頃には伊達藩の砲術師が揚げる花火に人が押し寄せて深川の万年橋の欄干が折れて死者が出る。

文久4年（1864）より幕末の動乱により中止。

明治元年（1868）に復活し盛大に行われた。この花火を担当したのは鍵屋で工場が亀戸にあり、川開きの当日は仕掛け花火の枠を皆で担いで隅田川の支流の船着き場まで運んだ。

明治4年（1868）5月28日、川開きの花火が雨のため、順延になり7月1日に実施。

明治5年（1872）5月28日、川開きを開催する。天気にも恵まれ人出が多く、納涼船の数で屋形船が五隻、伝馬船が七十隻、日除船が二百五十隻。7月26日に二回目の両国の花火を催す。

明治6年（1873）6月28日、この年から川開きの花火が一月遅れで開催。9月5日、両国の中村楼にイタリアの皇族が川蒸気で訪れ、柳橋の美形を30名ほど招待して花火を鑑賞。

明治7年（1874）7月5日は天気が良く各料亭とも満員客止めとなる。花火が丸く開くのは、この頃からで10代目鍵屋弥兵衛の苦心によるものだという。

明治10年（1877）鍵屋11代目、弥兵衛が塩素酸カリウム等により、赤色（紅）、青色を出すのに苦心をしたが、薄桃色ヒワ程度に終わる。

明治20年（1887）鍵屋11代目、弥兵衛が炭酸ストロンチウムと硝酸バリウム、炭酸洞により赤（紅）、緑、青色の発色に成功。この頃の花火の打ち上げ数は仕掛けが20本内外、打ち上げは100発ほどである。

明治23年（1890）7月16日、両国川開きを開催。打ち上げ花火が100本、仕掛けが10本、川開き万歳は新趣向で評判も上々であり仕掛け花火には「武蔵の月」。

明治25年（1892）両国橋の上流と下流で川開き花火を開催する。

明治28年（1895）8月9日、延期を続けた川開き花火を開催。打ち上げが130本、仕掛け20本。

明治30年（1897）8月11日、花火の八方矢車が中村楼前で打ち上げられた時に、群衆が急に移動したため両国橋の欄干が四間半ほど崩れて花火が中止になる。

明治31年（1898）8月6日、昨年の事故により両国花火に初めて橋上の交通整理（雑踏整理）が行われる。

明治36年（1903）5月から7月まで、鍵屋11代目弥兵衛がマニラに行きスターマインの技術を持ち帰り、8月の両国川開きで披露する。

明治37年（1904）両国川開きに初めて足場を組み立て、大仕掛け幅5間、高さ4間の日露戦争の図を描く。

明治40年（1907）8月3日の川開きでは大仕掛けは加藤清正の大虎退治の絵入りになり、この年から舟を両国橋から150間ずつ離すことになる。

明治41年（1908）8月1日に川開き花火を開催するも不況にて各料亭の申し込みが例年の半数に終わる。人出は10万人で船の料金は屋形で12円、屋根で10円の船頭付である。

明治45年（1912）7月19日は明治天皇御不例のため川開き花火を中止にする。

大正4年（1915）7月24日に両国川開き花火を開催。御大典奉祝にちなみ多くの観光客で賑わう。伝馬船の料金は船頭二人付で3円。

大正7年（1918）7月20日に川開き花火を開催。本年より両国橋を中心に上下流とも300間内の船の出入りを禁止する。大仕掛けは欧州大海戦光景、日英祝賀提灯。

大正13年（1924）7月19日、大花火大仕掛けは日本名所日光華厳の滝。鍵屋発行の大花火番組の宛名は従

来、割烹家遊船宿御中とあったが、この年より料理店一本となる。

大正 14 年（1925）7 月 25 日、川開き花火の大仕掛けは奉祝銀婚式大祝賀会の光景。

大正 15 年、昭和元年（1926）7 月 24 日、川開きの花火を開催。大仕掛けは皇孫殿下御降誕を祝って「石橋・獅子の舞」を制作。

昭和 4 年（1929）7 月 20 日の大花火大仕掛けは復興の「大東京全景」を披露する。昭和の初めは昼花火も上げられていた。等身大の紙の人形で吊物花火である。軍人や加藤清正・虎など子供たちは物干しに上ったりして奪い合いを取りあった。他に色の煙幕や音響爆弾など豊富であり特に大仕掛けは、この時代のメインになる花火で凱旋門や華巖の滝などで特に昭和 4 年の復興東京図は話題になった。

昭和 5 年（1930）7 月 19 日に川開き大花火を開催する。日本海大海戦の 25 周年を記念して「日本海海戦」の大仕掛けを打ち上げる。

昭和 6 年（1931）7 月 18 日に川開き花火を開催。大仕掛けは御帰朝記念大祝賀会夜景。

昭和 8 年（1933）7 月 21 日に川開き大花火を開催。一般の棧敷料は 1 円、乗合船が大人で 50 銭、小人で 30 銭の高値であるが満員となる。大仕掛け花火は日満親善大祝賀会。

昭和 9 年（1934）7 月 21 日の大仕掛けは皇太子殿下御降誕「御国の栄」で、国旗を手にした児童 3 人が日の出を背景に万歳と叫びながら歩いている絵を披露する。仕掛け花火は上下で 26 組（大仕掛けで足場の幅が八間、高さは六間）で打ち上げ花火は昼夜で 500 本余り。その間に流れ火などの広告の仕掛けもある。この頃で花火業者は全国に 420 軒ぐらいあった。

昭和 10 年（1935）の大花火仕掛けは日本大海戦 30 周年記念。

昭和 11 年（1936）7 月 18 日に川開きを開催。人出が多く約 100 万人。大仕掛けはオリンピック大会の景。

昭和 12 年（1937）7 月 17 日に川開きを開催。人出は 50 万人で前年の半数に留まる。大仕掛けは大江戸広重情緒で翌年から 22 年まで中止になる。

戦前は両国から浜町あたりまで納涼船がぎっしりと並び身動きができず、戦後は両国橋の上下両側と国電鉄橋の向こうでも上げていたので三カ所になる。

打ち上げの日は 7 月の第 3 土曜日と決まっており、その頃は潮の具合が良く干満の差が少ないので棧敷を組み舟を浮かべやすかった。また昔は潮の具合を見て花火の日を決めていたようである。

昭和 22 年（1947）5 月 3 日に新憲法発布記念祝賀花火が開催される。

昭和 23 年（1948）から再開。11 年ぶりで 8 月 1 日に両国花火組合（柳橋の料亭）の主催で両国花火大会を丸玉屋（上流）一社で実施。観客は 70 万人、警備出動の警官が 3000 人。9 月 18 日の竜灯祭の日には東京都観光協会が主催で第 1 回「全国花火コンクール」を実施する。棧敷席を設け入場料を取るが満員御礼になる。一つのブロックが仕掛け船三隻と打上船が一隻で両国橋際が第 1 ブロックで新大橋に近い方が第 5 ブロックになる。東京柳橋組合も全面的に協賛し、下流では皇太子殿下とマッカーサー元帥の御子息も鑑賞する。

戦後の花火では料亭ごとに店の幅だけ川に突き出るようにして座敷から川に面した棧橋を降りて舟に乗りこんだ。舟は一軒あたり数隻から 17 隻で客の多い店は河岸を借りていて最盛期は 200 隻ほどあった。

昭和 24 年（1949）7 月 23 日に川開きと花火コンクールを同日開催。

昭和 25 年（1950）7 月 22 日に両国川開きと第 3 回全国花火コンクールと合同開催。この年から川開きの打ち上げ場所が二カ所になる。

昭和 26 年（1951）7 月 21 日に川開きを開催。この年から第 4 回全国花火コンクールと別個に打ち上げることとするが、同日同時刻に催すことを協定する。

昭和 29 年（1954）7 月 24 日に川開きと第 7 回全国花火コンクールを同日開催。大仕掛けは日光陽明門。

昭和 30 年（1955）7 月 30 日に第 8 回全国花火コンクールと川開きを同日開催。大仕掛けは安芸の宮島。

昭和 33 年（1958）7 月 26 日に川開きを開催。優秀なブロックには総理大臣杯を授与する。

昭和 34 年（1959）全国花火コンクールが最後となる。大仕掛けは御結婚記念連獅子で、この年から五寸玉が禁止され四寸玉以下となる。

昭和36年(1961)7月22日に蔵前橋・両国橋間で川開きを開催。お城ブームにのった大仕掛けは日本の名城シリーズ。玉数は2400発で人出は23万6000人。

昭和37年(1962)から交通事情の悪化により川開きは中止となる。

昭和41年には竜灯祭が最後になる。竜灯祭は46年に一度行われるもので夏の柳橋は花火と納めの灯籠流しが行事であった。

昭和53年(1978)4月28日に台東区・墨田区・中央区・江東区が隅田川花火大会実行委員会を発足し7月20日に名称を両国川開きから隅田川花火大会に変更して復活させる。打ち上げ数は1万5000発。財源は公共预算(東京都及び墨田区・台東区・中央区・江東区)が主体となり住民を代表する実行委員会が運営にあたる。昭和58年(1983)7月30日に両国川開き250周年を記念して隅田川花火大会を実施する。

隅田川花火大会の主旨は、伝統の両国川開き花火大会を継承する行事として、都区民に潤いと憩いの場を提供しようというものである。昨年は7月29日(土)、午後7時5分から8時30分まで雨の中で開催された。



図-1 川開きを彷彿させる納涼船が行き交う隅田川花火大会

2 江戸時代の番付

花火を打ち上げる順番や予定が書かれたものをプログラムというが、江戸時代は「番付」(ばんづけ)と呼ばれていた。

享和子4年(1804)に浅草川の下三股の辺りで上げられた時の番付から内容を探る。3)

一 番	流星	柳火	二 番	打出し	群光星
三 番	流星	武蔵野	四 番	打出し	蜂巢立
五 番	綱火移し	金傘	六 番	流星	銀河星
七 番	打出し	粟散星	八 番		子持乱虫
九 番	流星	村雨星	拾 番	打出し	乱火
拾一 番	流星	庭月	拾二 番	打揚	光雷鳴
拾三 番	流星	赤熊	拾四 番	打出し	星下り
拾五 番	流星	千筋	拾六 番		数玉火
拾七 番	流星	柳火	拾八 番	打出し	孔雀尾
拾九 番	流星	星狂	廿 番	からくり	十二燈明替桃灯

廿一番	流星	三光	廿二番	打当し	赤熊
廿三番	流星	玉簾	廿四番	打出し	花獅子
廿五番	流星	武蔵野	廿六番	打出し	群光星
廿七番	流星	星替り	廿八番	打出し	乱虫
廿九番		数虎之尾	三拾番	流星	柳火
三拾一番	打出し	連竜火	三拾二番	流星	千筋
三拾三番	打出し	熊蜂	三拾四番	流星	友別
三拾五番	打出し	群光星	三拾六番	流星	赤熊
三拾七番	からくり	三国一	三拾八番	打揚二段発	初雷後晴天星
三拾九番	流星	星狂	四拾番	打出し	星下り
四拾一番	流星	武蔵野	四拾二番	打出し	粟散星
四拾三番	流星	七曜	四拾四番	打出し	乱火
四拾五番	流星	玉簾	四拾六番	打出し	蜂巢立
四拾七番	流星	村雨星	四拾八番	打出し	赤熊
四拾九番	流星	銀河星	五拾番	打出し	星下り
五拾一番	流星	柳火	五拾二番	打揚	光雷鳴
五拾三番	からくり	白幣	五拾四番	流星	武蔵野
五拾五番		子持乱虫	五拾六番	流星	村雨星
五拾七番	流星	柳火	五拾八番		綾虎
五拾九番	流星	早替り	六拾番	流星	武蔵野
六拾一番	打出し	群光星	六拾二番	流星	千筋
六拾三番	流星	銀河星	六拾四番		孫持乱虫
六拾五番	打揚	群光星	六拾六番	打出し	玉簾星
六拾七番		綾玉	六拾八番	打出し	昇降竜
六拾九番	水中からくり	飛乱虫	七十番	数流星	大柳

享保に花火が始まって約 80 年。一晚に 20 番という番付が 70 番まで増えている。

当時は暗くなるころから朝方まで花火を揚げていたそうで、45 分に一発が 10 分に一発になったのは非常に進歩したといえる。天和（1681）年間前後に書かれた戸田茂睡の「紫の一本」には「花火舟をば呼びかけて、一艘切にたてさす。枝垂柳に大桜、天下泰平文字うつり、流星、玉火に牡丹や蝶や葡萄に車火や、これにて仕出しの大からくり、桃灯、立笠御覧ぜよ。火うつりのあちはひは仕たり。」とある。しだれ柳は、流星花火のことで上空まで上りつめて火薬を固めた星を複数落とすもの、大桜は筒を複数並べて派手に大きく満開の桜をイメージしたように咲かせ、蝶は筒を上下斜めに四本配列し中央に火の出ない部分をこしらえて胴体を見せ、葡萄は明礬と硫黄を混合したものを団子状にして枝などに分け、火車は十字の木枠の四カ所の端に竹筒に黒色火薬を詰めたものを縛りつけ噴射によって回転させるもの。火うつりは細い竹筒に黒色火薬を詰めて綱を走らせる現在の綱火である。火薬を充填する作業では力の入れ具合によって圧力に変化をかけて火の粉が噴き出す具合に違いを見せたり、また火薬に鉄粉を混ぜたり焼酎を吹きかけ湿り気を与えたり、火の粉が噴き出す口の大きさを変えるなど、多様な技術を使い名称を付けている。

享和 4 年の三股の番付では「流星」が目立つ。流星は現在のロケット花火で打ち上げ花火の元祖である。火薬を詰めた筒に竹竿を装着して打ち上げる。上空での変化の違いにそれぞれ名称がつけられている。次に多いのが「打出し」で立花火のことで筒を立てて火の粉が噴き出すもので他に「からくり」といって仕掛け花火もある。注目は、この時代に「打揚」がいくつかあることで「長玉」（ながだま）と呼ばれていた時代で獣の皮を袋状にして火薬を詰めたもので花火が初めて玉になったころと想像する。

3 観客と警備

1990年代から情報誌の特集記事により花火大会の人気は上昇する。それにより今まで開催していなかった自治体も花火大会を主催するようになり競争が過激になる。平成10年(1998)より秋田の大曲では「日本の祭」シリーズとしてNHKで中継されることによって急激に観客が増加した。このころから筆者が見る限り5%以上の観客が各地の大会で増加傾向にある。ここ隅田川でも川開き(名称)の最後の昭和36年には23万6000人まで落ちたが隅田川花火大会と名称を変えて復活した昭和53年には一挙に77万人にまで上昇、いかに日本人が花火を好むか証明したものである。また2000年代からのインターネットの普及によって各大会の情報が一段とスピード化して拡散するようになった。特に個々の花火観覧者がネット上で自分の意見を主張するようになり花火大会の良し悪しに影響することとなる。競技会などでは審査結果が一部のマニアから不満などのネット上での書き込みなどもあり主催者としては審査に対して、より慎重にならざるを得ない状況にある。筆者はラーメンの好みのように一般論で大会の良し悪しは評価はできないと感じているが、通称「日本三大花火大会」のように独り歩きしていることは否めない。先にも書いたが筆者が見る限り観客は5%ほど年々増加の傾向にあり大会によっては安全上の問題から警備費が上昇し運営が危ぶまれているところもある。昨年話題になったのが「鎌倉花火大会」で一度は開催となったものの、その後中止が発表されたが最終的には市民などの有志が立ち上がり無事に開催される運びとなった。他には「伊勢崎利根川花火大会」「全国選抜北陸中日花火大会」「神奈川新聞花火大会」「宇治川花火大会」など運営資金や警備上の問題から中止に追い込まれ新聞やテレビの報道することとなった。他に観客の増加とは直接の関係性はないが近年のマナーの悪化なども問題の一つになっている。大都市圏で開催される有名花火大会では一晩に約3000件近くもの苦情の電話が寄せられる。それらは周辺の家々の軒先にゴミを捨てたり、私有地を近道代わりにするなどが多いが、花火の大きな音に合わせて犬が遠吠えして煩いなどの通報も複数あるようだ。このように様々な問題から主催者は頭を悩ませるようになり某大手の新聞社が主催する事業部の担当者は本来販促のために始めた花火大会だが、現在は販促の伸びには影響はなく苦勞だけで止めたいと話していた。警備は2001年7月21日に起きた「明石花火大会歩道橋事故」事故等により警察の指導も一層厳しくなり観客が増加するほど警備費の負担が大きくなることに注目したい。

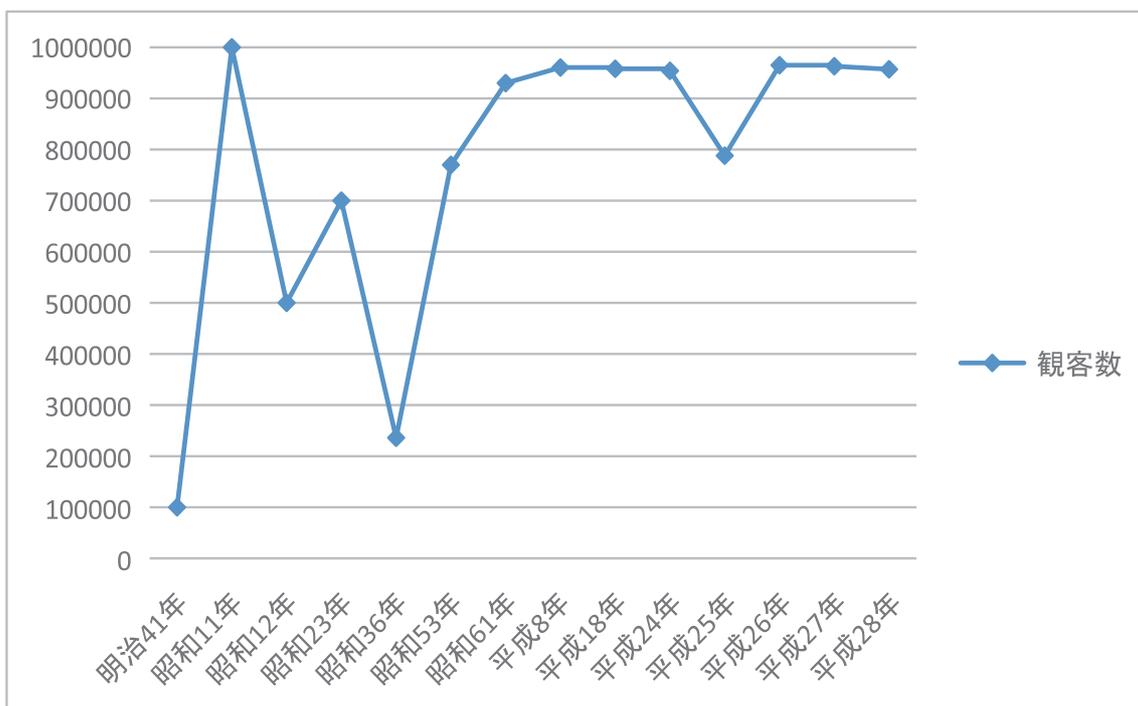


表-1 川開き(隅田川花火大会)の観客数

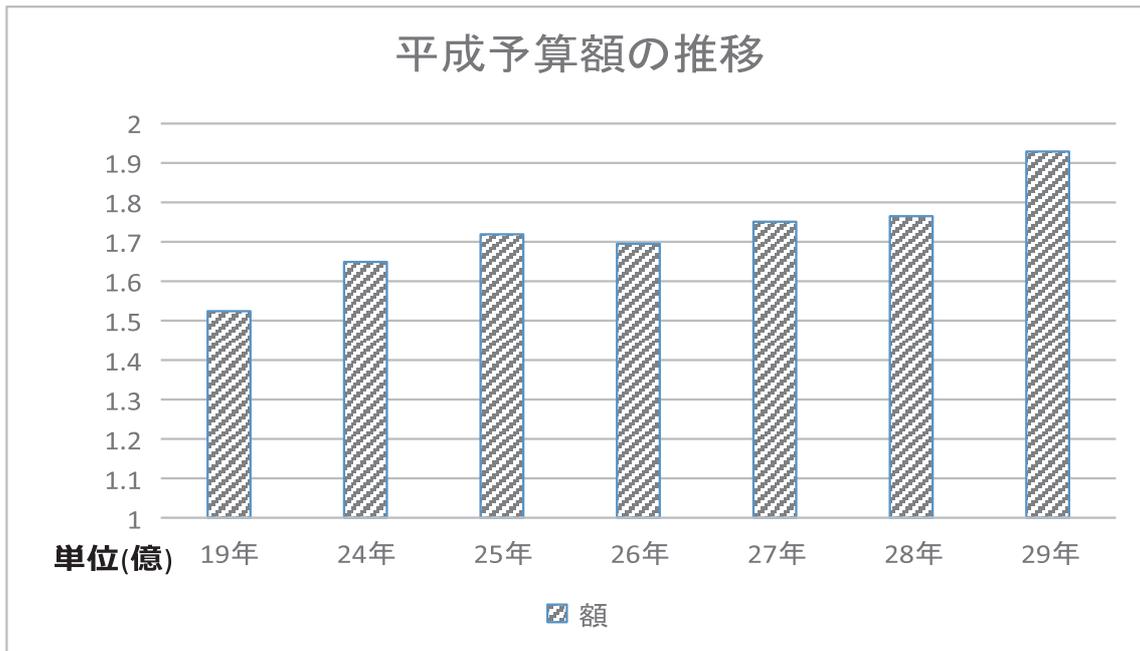


表-2 隅田川花火大会の総予算額

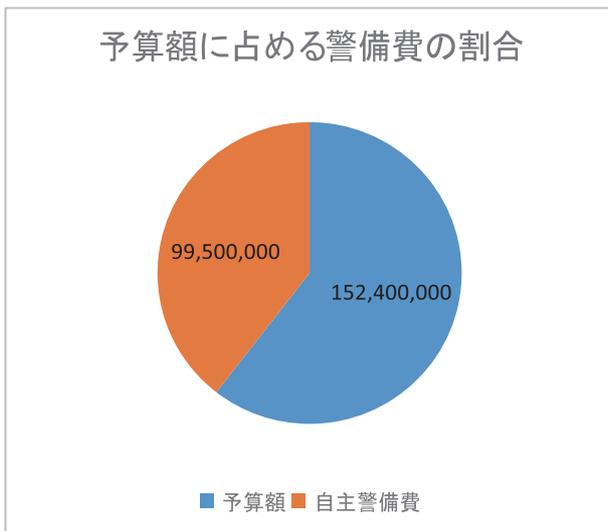


表-3 平成 19 年 (隅田川花火大会)

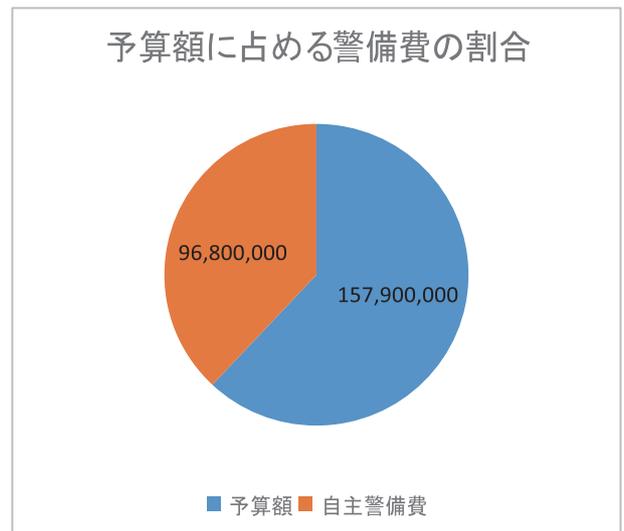


表-4 平成 24 年 (隅田川花火大会)

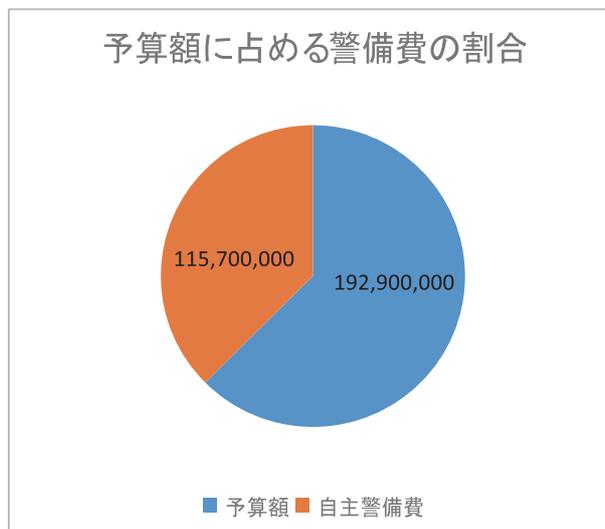


表-5 平成 29 年 (隅田川花火大会)

4 具体的な隅田川花火大会運営に係る支出増の要因について

- ・花火購入費
火薬の高騰による増額
- ・施設警備費
安全施設資材、警視庁要望などによる必要資材数の増額
東日本大震災復興及び東京オリンピック開催準備による資材単価及び作業従事者の人件費の増額
- ・実施本部費
会場設営に係る経費について、東日本大震災復興及び東京オリンピック開催準備による資材費及び作業等の人件費
- ・動員費
専門警備員配置に要する費用（警備委託費）について、混雑エリア拡大による雑踏警備及び警視庁要望による交通誘導警備員の配置増員
東日本大震災復興及び東京オリンピック開催準備による資材費及び人件費の増額
その他、都立汐入公園の警備等に係る費用の一部を実行委員会で負担している



図-2 スカイツリーが映りこんだ2015年の隅田川花火大会

Ⅲ 大会の運営

1 運営資金の確保

花火大会の運営資金のほとんどは市などからの補助金、企業からの協賛金で賄われてきたが近年は税収の減少による補助金の減額や不景気の影響による協賛金の減少もあり、有料席の売上げが全体の半分以上を占めるようになった。それには各大会主催者の競争の激化にともなうところが多い。情報誌などのマスメディアが取り上げる場合、玉数重視になり主催者は増量すべく予算を集めなければならず、大規模な有料席を作り、売上げを運営費に充てる手法を取っている。そのため年々、花火が観覧できる地域は大規模な有料席に様変わりし、無料で観覧するスペースが減少しているのが実情である。ある大会では10数年前に会場前の緑地全体を有料席にしたため市民から苦情で問題になったこともある。

例えば、今年一度は開催が決まった鎌倉花火大会だが観光協会が実行委員会から脱退したことによって突如中止になったが、市民有志が中心になって実施しようと「鎌倉を愛する者がつくる花火大会実行委員会」が発足した。

資金調達的手法としてはインターネットを利用したクラウドファンディングと趣旨に賛同した店舗などに募金箱を置いて寄付を募る「市民玉プロジェクト」で4月21日にプロジェクトが立ち上げられ5月末までの目標が1000万円。最終的に1100万円ほど集まった。近年クラウドファンディングという手法は全国的にも増加傾向にある。

では隅田川では実際にどのような方法を取っているのか。

隅田川花火大会では財源の確保について

- ・新規の企業協賛のための営業活動や協賛プランの提案
- ・市民協賛席及び観覧船標旗の値上げ

経費削減の取り組み

- ・花火打ち上げ玉数確保のため、見栄えを配慮のうえ単価の低い小型の玉に変更
- ・委託事業者との契約方法や仕様見直しなどによる削減
- ・過去の実績から必要な資材、印刷物、制作物の削減
- ・従事者用の配布資料の見直しによる削減

上記のことから注目すべき点は経費削減の取り組みである。筆者が今まで調査をした主催者からは財源の確保ばかりに目を向けて削減の取り組みに関してはほとんど行われていないのが実情である。全ての経費を原点回帰したうえで細かく精査し無駄がないかを見当する必要がある。

2 上昇する警備費（運営費）と対応

観客が増加するほど警備費も同様に増加するため主催者では運営費が一段と逼迫する事態が起きている。対応として有料席の増加や金額の値上げなど様々な試みをしているにもかかわらず中止に追い込まれる大会も少なくない。また主催者によっては、これ以上観客が増えない試みをしているところもある。例えば玉数を少なく発表し魅力に欠ける対応や、ポスターやチラシなど一切の印刷物による広報活動を自粛したり情報誌などに扱わないように要請するなど、あらゆる手法を講じている。

IV おわりに

これまでの事例や経過報告の観点から今後の方向性についてこのように考えるものとする。

- ・安全対策に係る資器材や人件費の高騰に対応するため協賛額を見直す。
- ・地域住民、業界、行政を中心とした現在の実行委員会、当番区となる台東区、墨田区を事務局としてほぼ全業務を行う手法を改める。
- ・具体的には民間事業者をより関与または運営に参加させる案で、将来的な実現性も含め検討する。
- ・多くの有料席を作ることによって観客を把握することが可能となり安全性が高まるとともに警備費の縮小にも繋がると考える。但し全てを有料とするには花火大会本来の意味あいや周辺住民の理解が必要であり今後の検討課題でもある。

【補注】

- (1) 江戸時代後期に至るまでの打ち上げ花火が完成されるまでは花火をすることを花火を「揚げる」と表現している。「上げる」の場合は打ち上げ花火のことである。

【参考文献】

- 1) 武藤輝彦 (2000)「日本の花火のあゆみ」リーブル
- 2) 隅田川花火大会実行委員会 (昭和 58 年 7 月 1 日)「花火／下町／隅田川」隅田川花火大会実行委員会 p6. 8. 28.

29. 33

- 3) 松浦静山 (昭和 52 年 9 月 26 日) 「甲子夜話」平凡社 pp 200-201
- 4) 三田村鳶魚 (昭和 51 年 7 月 24 日) 「三田村鳶魚全集」第 9 卷 中央公論社 p 109
- 5) 吉田忠雄・丁大玉 (2006 年) 「花火学入門」プレアデス出版 p 30
- 6) 冨木一馬 (2004 年) 「花火の本」淡交社 p 120
- 7) 冨木一馬 (2001 年) 「日本列島花火紀行」山と溪谷社 p 146
- 8) 清水武夫 (1998 年) 「花火」復刻版 サークル花火万華鏡 p 15
- 9) 松永猛裕 (2014 年) 「火薬のはなし」講談社 P 118
- 10) 小勝郷右 (1983 年) 「花火－火の芸術」岩波新書 P 32-33
- 11) 江口春太郎 (1982) 「花火ものがたり」中日新聞社 p 67-68
- 12) 細谷政夫・細谷文夫 (1999) 「花火の科学」東海大学出版会 p 17
- 13) 湯次行孝 (1996) 「国友鉄砲の歴史」サンライズ印刷出版部 p 11